

1. 研究のテーマ

回復期リハビリテーション病棟入院患者における
排泄動作と退院先との関連要因の検討

2. 研究の背景これまでの研究の概要

回復期リハビリテーション病棟においては、在宅復帰率を維持するため、入棟後初期から適切な予後予測に基づき、効果的なリハビリテーション介入や退院支援を行っていく必要がある。

先行研究でも、在宅復帰に関連する要因の検討は行われており、家屋調査の有無・入院時の ADL（FIM 総得点）といった因子が挙げられている¹⁾。在宅復帰のためには ADL の向上が必要だが、中でも排泄は自立して可能であることを本人・家族とも強く希望するニーズの高い ADL の一つである。中村らの脳血管疾患患者を対象とした研究でも、退院時点でトイレ移乗に何らかの介助を要し、さらに家族構成人数が 2 人以下の場合、自宅退院率は極めて低い（21.7%）結果となっている²⁾。

しかし、回復期リハビリテーション病棟患者を対象に、FIM の総得点ではなく各項目に着目し、特に排泄関連動作がどの程度退院先に影響を及ぼすのか検討した報告は少ない。また排泄動作が自立していない場合でも、どのような要因があれば在宅復帰が可能となるのか、ADL を構成する各因子について個別の検討は十分に行われていない。

3. 研究の目的

回復期リハビリテーション病棟入院患者を対象に、排泄関連動作の自立度が在宅復帰に与える影響を明らかにするとともに、排泄以外の要因と退院先との関連を検討する。

4. 研究の方法

【対象】 2026 年 6 月 1 日～2027 年 5 月 31 日に回復期リハビリテーション病棟を退院した患者（死亡退院や転棟者を除く）

【期間】 2026 年 6 月 1 日～2027 年 5 月 31 日

【方法】

前向き観察研究にて、当院回復期リハビリテーション病棟退院患者において、退院時 FIM の①排泄関連動作項目（下衣更衣/排尿・排便コントロール/トイレ動作/トイレ移乗/歩行）②排泄関連動作を除いた運動項目③認知項目に分けロジスティック回帰分析を行い、退院先（自宅/非自宅）への影響を検討する。その他に要因として年齢、疾患、介護度の有無、同居家族の有無、家族構成、家屋調査の有無といった因子に差があるかを調べ、退院先と関連のある要因の検討を行う。

5. 参考文献

- 1) Japanese Journal of Health Promotion and Physical Therapy

Vol.4 ,No.4 : 171-175,2015

糸谷圭介、糸谷素子、原良昭、加藤純一

リハビリテーション病院入院患者における在宅復帰のための要因の検討

- 2) リハビリテーション医学 2002 ; 39 : 396-402

上松海雲、猪飼哲夫

高齢脳卒中患者が自宅退院するための条件

6. 研究責任者

リハビリテーション部 科長 小田原 健太